

平成 25 年度 卒業生答辞

今年の横浜は幾度となく、雪景色に染まり、例年にない寒さでした。学内のまだ硬い桜のつぼみは希望を内に秘めながら、出会いと別れの春の到来を待っています。本日は、私たち卒業生のためにこのような盛大な式典を催していただき、誠にありがとうございます。鈴木学長をはじめ、ご多忙にもかかわらずご臨席くださった皆様に、卒業生一同心より御礼申し上げます。

4年間の実りある大学生活を振り返りますと、月日の流れというものは非常に早いものだと感じます。4年前、胸に大きな期待と一抹の不安を抱き、私たちは日本各地のみならず、世界中からこの横浜国立大学に集まって参りました。学業はもちろんサークル活動、ボランティア、留学等、一人一人が力を注いだ学生生活は異なりますが、それぞれが学生として過ごした時間は、かけがえのないものであり、これからの私たちの人生にとって大きな糧になると思います。

中国生まれの私は何らかの形で日中の懸け橋になりたいという漠然とした想いを抱き、工学部物質工学科に入学しました。入学当初は、実験レポートと課題に追われる鬼のように忙しい日々友人と文句ばかり言っていました。また、周囲の目を常に気にし、サークルとバイトに明け暮れ、忙しい偽りの自分に満足した、空虚な日々を過ごしていました。そんな私の大学生活に転機が訪れたのは2年生の春です。中国の学生が本学を訪問し、彼らの通訳を行ったとき、彼らの知識への貪欲さ、成功への野心をひしひしと感じ、自分の中で忘れかけていた情熱を思い出したのです。そのときから、自分の気持ちに忠実となり、日中の発展に自分はどうのような貢献ができるのか、真剣に向き合うようになりました。また、日系化学メーカーのインターンシップとアメリカ留学を通して、世界での日本の技術力と生産管理の素晴らしさを体験しました。これにより、自分の方向性がどんどん固まって行きました。そして自分が一人の技術者として、日中の発展に力を尽くしたいと決めたのは、研究室に所属した4年生の時です。研究の必要性和指導教員の熱い思いに触れ、これからの世界を牽引していく技術者となることへの自覚が芽生えたからです。今振り返りますと、この4年間のどの経験も私という人間を形成する上で、必要不可欠のものでした。これらの経験を与えてくれた横浜国立大学に所属できたことは、私の誇りです。

4月から私たちは高遠な理想を胸に遥か長い道のりを一人で歩み始めます。道を見失うこともあれば、道無き道を進まねばならぬことも、自分を信じられなくなることもあるでしょう。横浜国立大学でかけがえのない青春時代を過ごした、そんな私たちなら、どんな困難な状況においても、一筋の光が見えます。横浜国立大学で学んだことを誇りに思い、ここで受けた恵みを、自分たちの人生にだけでなく、より広く社会へと還元していく責任を強く自覚し、日本のために、ひいては世界のために大きく貢献できる人間になることを目指して、卒業生・修了生一同今後とも精進してまいります。

最後になりますが、未熟な私たちにも適切な助言を与えてくださり、私達の可能性を広げてくださいました先生方、また素晴らしい環境を整えてくださった職員の皆様に、改めて御礼申し上げますとともに、大学卒業を迎えた今日まで私たちの成長を見守り続けてくれた家族に感謝します。そして、横浜国立大学の一層の発展を願い、答辞とさせていただきます。

平成 26 年 3 月 26 日
卒業生代表（工学部）